

## あとかき

この科研研究を終えてまもなく1年になる今、ようやくあとかきを書ける状況まで漕ぎ着けた、というのが現在の実感である。今回、科研の期間内での報告書刊行は諸般の事情で初めから無理とわかっていたが、夏までには何とかできるだろうと高を括っていた。それからよもや半年以上の時日を要しようとは思っていなかった。早々に原稿を頂戴した研究分担者のみなさまに多大のご迷惑をおかけすることになってしまったことを、まずもってお詫び申し上げなくてはならない。

3期にわたる基盤研究(S)の始まりについては、第Ⅱ期科研の報告書のあとかきでも書いたのここでは触れないが、以来ひとくちに15年といっても、当然ながらさまざまなことが去来して、何かから語ればよいか言葉を知らない。大型科研の研究代表者の重責を曲がりなりにも果たして来られたのは、直接的には所内外の研究分担者のみなさまのお蔭である。加えてこの科研を続けさせていただけたのには、機関としての奈文研に対する期待が預かる部分が殊の外大きく、その意味で一連の科研は奈文研の事業としての側面が強い。それを支えてくださった町田章・田辺征夫・松村恵司の3代の所長をはじめとする所員のみなさまに、心からお礼を申し上げたい。

この間科研の制度も大きな変容を遂げた。思い起こせば、3期の基盤(S)では採用に至る過程もそれぞれ異なる。第Ⅰ期科研は書類選考のみであった。第Ⅱ期科研ではヒアリングが導入され、指定された時間内のプレゼンに神経を擦り減らしたが、その直前にダイヤモンドホテルの喫茶室でのリハーサルで中川先生・耒代先生、それに馬場さんに絞られた(?)のも、今となっては楽しい思い出である。

また、大型科研ならではの制度に中間審査(進捗状況審査)がある。この制度は、研究の遂行にとってはかなり辛いものではあったが、前倒して成果を挙げ研究を遂行していく推進力になったのは間違いない。ただ、私どもの科研研究のデータベース構築のように、成果を形で示せる研究には

支障はないとしても、長時間の地道な積み重ねが必要な人文学の研究には、まことに辛い制度といわなければならない。また、進捗状況評価に重きが置かれるあまり、最終報告書の位置付けが曖昧になった点も否めないように思う。冊子体の報告書作成の義務がなくなったのはありがたいことだとは思いますが、何らかの形で記録を残しておくこともまた重要だと思う。そうした地道な研究成果が次なる研究課題の採択にあたって正当に評価されるべきだと思う。制度的には不要である本書をまとめた意図もそこにある。

電子申請のシステムの導入で省力化された諸手続も今や隔世の感がある。全て手書きで申請書を作成し、費目ごとの色をマジックで塗り分けていた30年近く前のことがなつかしく思い起こされる。電子申請システムになってから、某分野の審査を縁あって担当させていただきことがあるが、手書きの申請書を熟読しての審査の労力たるやいかばかりであったらう。

年々予算が削られ外部資金の獲得が至上命題となる中、科研費のもつ比重は増すばかりである。ただ、科研費にも2種類あって、この科研のように研究所の業務の遂行の一環としての研究と、個人研究の範疇のものがある。業務研究と個人研究の境目は研究分野によって人それぞれであるが、その接点が少なければ少ないほど、業務外で科研研究を遂行するのは困難を極めよう。その点でいえば、大型科研は業務の一環を担うべき研究であり、外部資金獲得と業務の推進を一挙に実現できたわけである。3期にわたる科研費による研究を、まさに本務として進めてくることができたのはまことに幸せなことであった。

本来の予算でまかなわれるべき経費の不足を科研費で補うというあり方がよいかどうかは別として、科研費がなければ、データベースの更新も覚束なかったはずである。一度科研費によって広げた間口を維持するには、相応の手立てが必要となるが、そこはポジティブに考えるべきであろう。

(渡辺晃宏)